



自宅の裏手から水芭蕉の群生を眺める菅野さん

花を守り育てる人たち

気候のせいでしょう。今年の水芭蕉も桜も水仙も、間を空けずに見頃を迎えました。

二枚橋と比曽の水芭蕉の群生地を訪れると、木もれ日の下のせせらぎに、白い花姿がひっそりと並んでいました。

比曽では、自宅の片付けをしていた菅野義衛さん(比曽)に会いました。菅野さんの自宅は群生地に隣接していません。「霜と風で少し傷んでしまったね」。群生地を見下ろし



二枚橋の群生地。木もれ日に、白く輝く水芭蕉



水仙が導く久保曾の道。一角には野の花の可憐な姿も見える

花に思いを寄せながら

「自宅に帰る時、北山初夫さん(飯樋町)が震災前に植えた水仙の咲く道を通っているの」と教えてくれたのは中島信子さん(比曽)でした。「除染の黒いバッグを見るのは嫌だけど、あの水仙の道が楽しみで、帰りたいなあと思うのね。心のいやし」。国道399号線から比曽に向かう道の久保曾集会所付近。何種類もの水仙が、峠の起伏をなぞる黄色いステッチのように並んで咲いていました。

大雷神社の桜並木も、花の盛りを迎えていました。「ヤドリギがたくさん付いてしまつて」と、手入れができないはがゆさを話していた地域の方の顔が浮かびました。村内のソメイヨシノには、確かにヤドリギの緑が目立つようになりました。けれど桜並木は、臆することなく、こぼれんばかりに花を付けて咲いていました。やがて来る本当の春を静かに待っています。



大久保さんの水仙の庭。まるで絵本の挿絵のよう

を見守っています。「いやいや、気が向いた時にできる程度だけれどね」。

大久保金一さん(小宮)の自宅回りの水仙も、二面に美しく咲いていました。大久保さんの自宅がある場所には、その昔酪農で入植した人がいたことから「マキバ」という別名があるそうです。大久保さんが、ここに「マキバノハナゾノ」を作ろうと思いついたのは、50年ほど前のこと。一度は夢で終わった

花つきの良い枝を風が揺する大雷神社の桜並木。避難後休止している例大祭のにぎわいがしのべられます



その計画が、被災後にさまざまにまな人と関わる中でよみがえりました。「ふくしま再生の会」や全国から訪れる有志の皆さんによる桜の植樹が進められています。大久保さんが、「今回はまた県外から60人ほどが植樹に来てくれるようです」と、すでに約100本の苗木が植えられた自宅裏を案内してくれました。二回りに満開の白木蓮の下。金一さんは、「とにかくきれいに除染をしてほしい。失ったものは、お金で買えるものではないのです」と目をうるませました。そして思い直すように、「桜に続く季節も楽しめるよう、アヤメも植えてみたいと思っているんです」と。挑戦をするかのように、金一さんのハナゾノ作りは続きます。

一方、大火山に自生する

山ツツジの見頃は、5月初旬から。震災前から整備を行っている村議会OB会の皆さんが、毎年、草刈りなどして、手入れを続けています。「いつか名所として、皆が訪れる場所になってほしいんだ」。鮮やかな朱色やオレンジがかつたピンクなど、色合いの違う山ツツジのグラデーションが、新緑との見事な競演を見せてくれます。

大火山のツツジ(平成27年5月撮影)